生涯音楽学習継続の困難さ
―合唱活動を中断した学習者のインタビューの分析―

小　坂　　光
（広島大学大学院人間社会科学研究科博士課程後期）

Difficulties in Continuing Lifelong Music Learning:
Analysis of Interview with a Learner Stopped Choral Activities

Hikari KOSAKA

Abstract
Lifelong music learning can be established only when the frequency and intensity of learning match the learner's lifestyle and when there is a relationship between the group and the learner. However, in choral activities, as there arise many situations in which every member cannot participate in every performance, learners who fail to participate in music performances consistently over time stop continuing to learn. A significant number of studies on lifelong learning indicate that the continuation of the same activities and learning is necessary to ensure lifelong learning. Nevertheless, it is crucial to examine how people who choose not to continue learning perceive their past learning experiences afterward. This study aims to clarify problems that exist in continuing lifelong music learning, how past learning experiences are perceived, and how past learning experiences affect the present. I analyzed the narrative of one subject who stopped their choral activities by adopting the Trajectory Equifinality Model. The study results showed that those who stopped their studies use their previous learning experiences and move toward self-actualization. Subsequently, this study showed that for the subject, the value of engaging in choral activities lays in the relationships and intentionality obtained by participating in choral activity rehearsals.

１．研究の背景と目的

成人の音楽学習における知のあり方について，川村（2005）は音楽の技能や知識の獲得を第一義とする目的合理的な学習から，音楽と人間との関係から生成する個別的，一回的な意味に焦点をあてることで，指導者や共同学習者との関わりのなかで意味を編み直していく意味生成的な学習への転換を示唆している。クラントン（2005）は，生涯学習の文脈での学習について「経験によってもたらされる思考，価値観，態度の持続的な変化」(p.5）と定義している。学習は，状態や結果ではなく，自分のなかに存在する思考や価値観の変容が重要なのである。また，筆者はこれまで，生涯音楽学習の場が音楽の技術習得だけではなく，状況的学習の場や実践コミュニティの場となりうるため，共同学習者間や指導者・学習者間の関わり方も学習の一環であると指摘してきた（小坂 2021a, b)。学習者の生活スタイルに合った学習の頻度や強度，団体と学習者の関わりが存在して初めて共同的な生涯音楽学習が成立する。しかし，共同学習の性質をもつ合唱活動では，全員が同じ時間・場所に参加できない状況も多々存在し，その場に参加できない学習者は継続を断念してしまう。生涯学習研究では同じ活動や学習の継続が重要視される傾向にあるが，学習を継続しないという選択をした人が，その後過去の学習経験をどのようにとらえているのか，過去の学習経験が現在にどのような影響を与えているのかを明らかにすることは，生涯学習の発展に重要な部分となりうる。

学習を中断したことは一般にネガティブなこととして捉えられるため，そのような人を研究対象者とすること自体に困難を伴う。しかし本研究では，研究の必要性からインタビューの承諾が得られた 1 名の対象者の語りの分析をとおして，生涯音楽学習の継続の難しさに存在する問題や，過去の学習経験をどのようにとらえているのか, 過去の学習経験が現在にどのような影響を与えているのかについて明らかにする。

２．研究方法

２．１　インタビューの方法と対象者

2020 年 8 月に，X 県に在住している，合唱活動を中断した男性にインタビューを実施した。

調査対象者は A さん，48 歳（当時）男性。Y 県出身で高校から合唱を始め，X 県の大学に進学し，大学合唱団に入団する。大学卒業後はX県で医師として仕事をおこなっている。大学卒業後，定期的な合唱活動はおこなっておらず，数年に 1 度程度開催される大学合唱団の OB 合唱に参加している。

インタビュアー（筆者）は,「今までの自分の音楽活動について，どんなことが起こったか，そこでどんなことを思ったか，時系列で並べたりして，お話を作るようにしてください」という説明ののち，半構造化面接をおこなった。インタビューの所要時間は 74 分であった。なお，インタビューの実施及び研究成果の公開にあたり，調査対象者に研究内容を口頭と書面で説明し，承諾を得た。

２．２　データの処理

インタビューは録音後，逐語記録化し，分析データとした。学習者の辿ったプロセスを検討するにあたり, 学習者の行動の決定には指導者の介入や環境的要因が影響を与えたと考えられた。そこで本研究では，複線経路等至性モデル（TEM: Trajectory Equifinality Model，安田・サトウ 2012）を用いて分析をおこなった。TEM は対象者に起こった出来事を時間とともに描くことに適した方法で，対象者の行動に影響を与えた内的・外的要因の理解を可能とするものである。

分析においては，学習の継続と中断の視点を持ち，次の手順でおこなった。①インタビューにおける語りを意味のまとまりごとに切片化し，事象を時系列に並べた。②まとまりごとの内容をよく表すラベルを作成した。③大野内・伊藤・枝川・樋口（2021）を参考に TEM の概念を用いて，対象者の行動の影響要因などを検討し，TEM 図を完成させた。その際に用いた TEM の基礎概念は表 1 のとおりである。

表１　TEM の基礎概念と説明

基礎概念	説明	本研究での位置づけ
等至点：EFP （Equifinality Point）	分析範囲内の収束する地点	合唱活動を継続しない
両極化した等至点：P-EFP （Polarized Equifinality Point）	等至点と対局の意味をもつ，仮定される別のプロセスの終点	合唱活動を継続する
分岐点：BFP （Bifurication Point）	ある選択によって各々の行動が多様に別れていく地点	決定事項への反応（肯定的・否定的）
必要通過点：OPP （Obligatory Passage Point）	等至点へのプロセスのなかで至るであろう通過点	合唱活動のプロセスのなかで至るであろう通過点
社会的方向づけ：SD （Social Direction）	等至点に向かうのを阻害する力として働く環境要因	合唱活動を継続するための外的要因
社会的助勢：SG （Social Guidance）	等至点に向かうのを後押しする力として働く環境要因	合唱活動を継続しないという選択のための外的要因
内的方向づけ：DIS （Direction In the Spirit）	等至点に向かうのを阻害する力として働く内的要因	合唱活動を継続するための内的要因
内的助勢：GIS （Guidance In the Spirit）	等至点に向かうのを後押しする力として働く内的要因	合唱活動を継続しないという選択のための内的要因
介入点：IP （Intervention Point）	介入者による関わりや決定事項	指揮者などからの決定事項

３．結果（TEM 図による分析）

A さんが合唱活動を開始してから現在までの合唱活動への関わりの強度とそれに対する意識の変容のプロセスを学習の継続と中断の視点から分析した結果，時期によって意識の変容が確認できた。その時期は大きく 3 期に分けられ，各時期の特徴を表す名前を付けた。Ⅰ期は「受動的な学習者として」，Ⅱ期は「自律的な学習者への過渡期」，Ⅲ期は「学習を継続しない選択の後」である。以下では，可視化した各時期の TEM 図と対応させながら，対象者の行動やその背景について概観する。なお，本文では TEM の概念を[SD／SG／DIS／GIS]《IP》【EFP／BFP／OPP】のように表す。

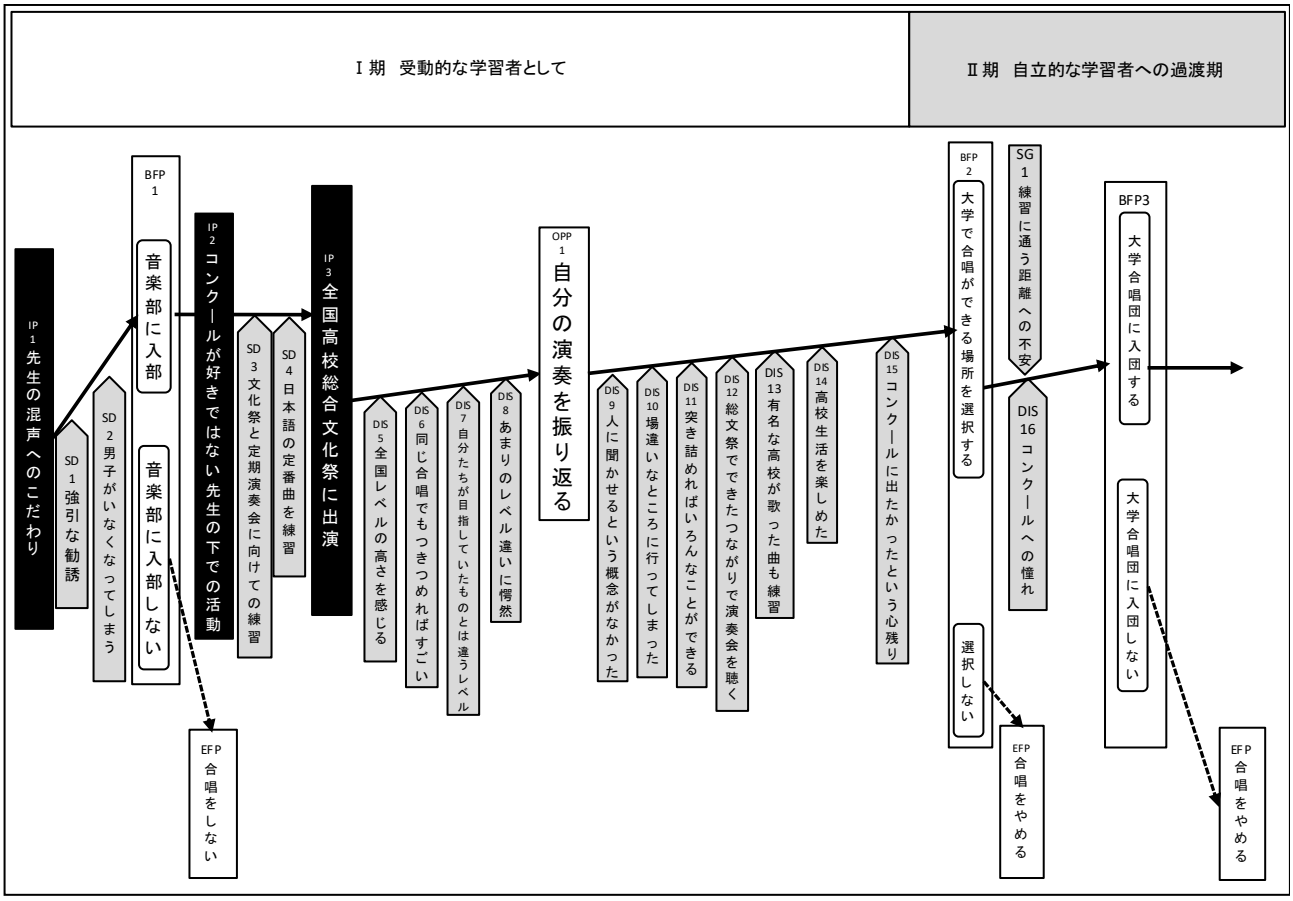

図１　高校時代から大学合唱団入団までの TEM 図

Ⅰ期　受動的な学習者として

A さんは高校入学後，男子部員の人数が少ない音楽部が，顧問の《IP1: 先生の混声へのこだわり》のもと，音楽部員の[SD1: 強引な勧誘] によって【BFP1: 音楽部に入部】することになる。

なぜ自分に声がかかったかは自分では分からないと話すが，A さんは幼少期にエレクトーンの経験があるうえ, クラスの代表などにも積極的に取り組んでいたため, 音楽部への入部には大きな抵抗はなかった。顧問の先生はコンクールに対して「順位をつけるなんて音楽では邪道だ」という考えをもっており，《IP2: コンクールが好きではない先生の下での活動》に取り組むこととなる。具体的には, 毎年おこなわれる[SD3: 文化祭と定期演奏会に向けての練習]として，[SD4: 日本語の定番曲を練習] することを中心としていた。高校 2 年生の時に,《IP3: 全国高校総合文化祭に出演》する機会を得る。出演のため，自分たちなりに一生懸命練習に取り組み，演奏後は満足もしていたが，他の学校の演奏を聴き，[DIS5: 全国レベルの高さを感じる]。そして，[DIS6: 同じ合唱でも突き詰めればすごい]と感じ，[DIS7: 自分たちが目指していたものとは違うレベル]を目の当たりにし，[DIS8: あまりのレベル違いに愕然]するという，衝撃的な体験をする。それらを踏まえて【OPP1: 自分の演奏を振り返る】と，[DIS9: 人に聞かせるという概念がなかった]，あるいは[DIS10: 場違いなところに行ってしまった]という反省とともに，合唱とは[DIS11: 突き詰めればいろ

んなことができる]という，これまで自分が知らなかった視点を得る。その後， [DIS12: 総文祭（全国高校総合文化祭）でできたつながりで演奏会を聴く]など他の高校に出向いたり，楽譜を取り寄せて [DIS13: 有名な高校が歌った曲も練習]したりするなど，さらに合唱との関わりを深めるための行動をとるようになる。高校卒業の際には， [DIS14: 高校生活を楽しめた] という気持ちとともに，[DIS15: コンクールに出たかったという心残り]もあった。これらの経験から，進路選択の際には自分が学びたい医学部があり，かつ【BFP2: 大学で合唱ができる場所を選択する】という気持ちを強くもって進学した。

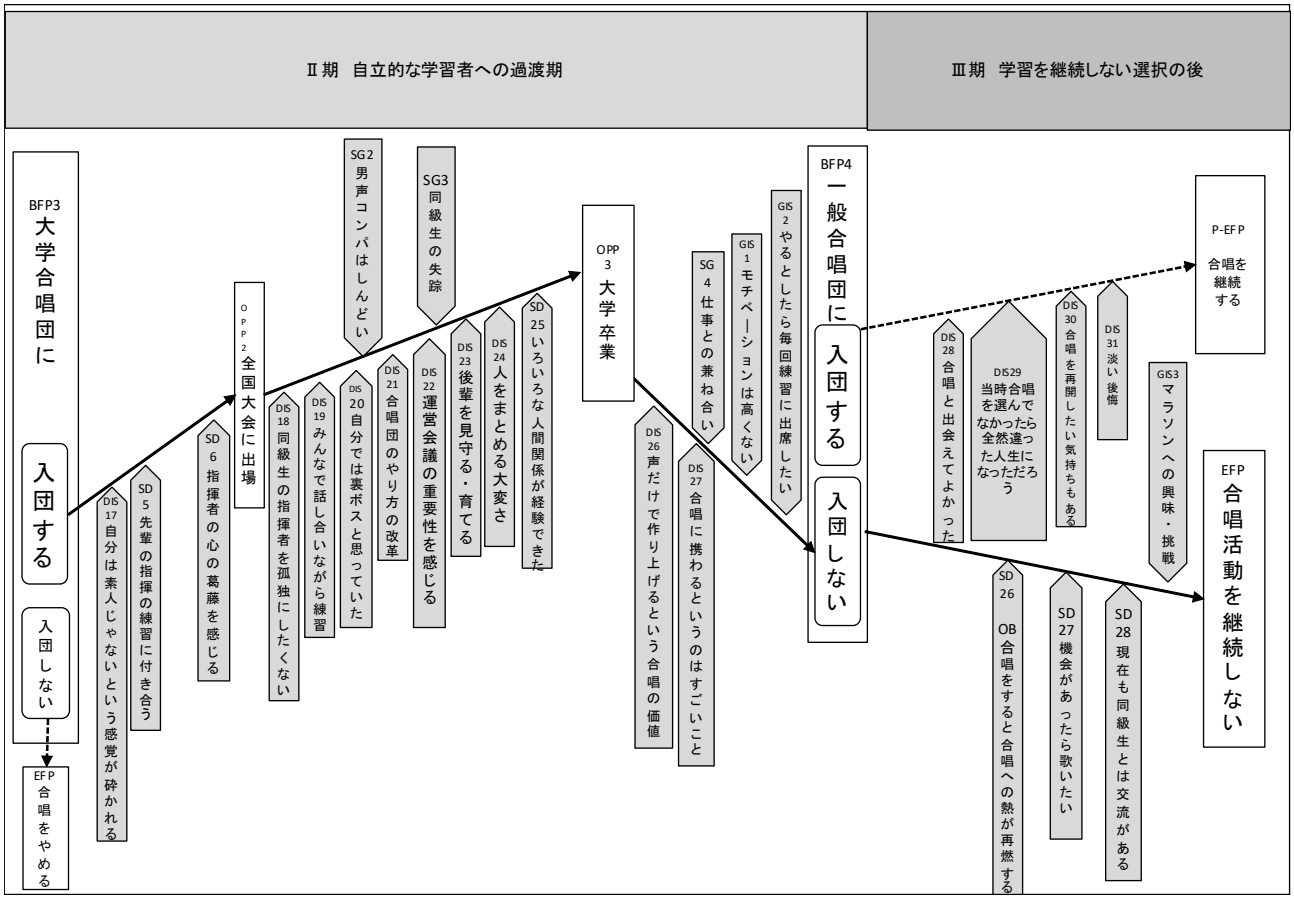

図２　大学合唱団入団から現在までの TEM 図

Ⅱ期　自立的な学習者への過渡期

合唱をしたいという気持ちで大学進学をしたが，所属する医学部にある合唱団はコンクールに出場する団体ではなく，ここでは高校時代と同じような活動しかできないと思った。本学にある大学合唱団であれば自分のやりたいことはできると考えたが，週に数回ある[SG1: 練習に通う距離への不安]がつきまとう。しかし，やはり [DIS16: コンクールへの憧れ] の気持ちが強かったため，最終的に【BFP3: 大学合唱団へ入団する】ことを決めた。新入生は初心者ばかりのなかで，自分はすでに 3 年間の合唱の経験から自信を持って入団したが，先輩の姿や練習から， [DIS17: 自分は素人じゃないという感覚が砕かれる]。2 学年上の [SD5: 先輩の指揮の練習に付き合う]ことがかなり多くあるなか，その先輩が悩んだり落ち込んだりする姿を見て指揮者は孤独であり，[SD6: 指揮者の心の葛藤を感じる]こともあった。その後，練習の成果もあり，大学 1 年生から【OPP2: 全国大会に出場】することになる。先輩指揮者の練習に付き合って，指揮者の孤独感や葛藤を感じていたため，A さん自身が中心学年になった際は[DIS18: 同級生の指揮者を孤独にしたくない]という思いが強くあった。そのため，[DIS19: みんなで話し合いながら練習]をするような形にしたり，朝練に取り組んだりした。また，A さんは医学部だったため合唱団の役職にはつかなかったものの， [DIS20: 自分では裏ボスと思っていた]ことから運営に関して最大限バックアップしようと，[DIS23: 合唱団のやり方の改革]にも携わり，自分たちの合唱団を運営していくための[DIS22: 運営会議の重要性を

感じる]ようになった。一方で，運営会議に耐えられなくなった[SG3: 同級生の失踪]という事件もあった。A さんが中心学年を退いた後には，[DIS23: 後輩を見守り・育てる]という同級生の思いで，4 年生でありながら全員合宿に参加したり，運営の体制を支援する活動を行ったりしていた。これらの活動のなかから，[DIS24: 人をまとめる大変さ]や[DIS25: いろいろな人間関係が経験できた]と感じている。医学部は 6 年制で，5，6 年生でも活動に参加することができたが，実習等で忙しく，他学部の同級生と同じ 4 年生が終わるタイミングで大学合唱団も卒業した。大学を卒業して活動を継続するという視点は述べられていない。【OPP3: 大学卒業】の時には，合唱に対して[DIS26: 声だけで作り上げるという合唱の価値]を感じ，[DIS27: 合唱に携わるというのはすごいこと]であるというポジティブな気持ちで大学合唱団の活動を終えている。

Ⅲ期　学習を継続しない選択の後

大学卒業後，医師としての仕事がスタートし，不規則な[SG4: 仕事との兼ね合い]で【BFP4: 一般合唱団に入団しない】という選択をする。その背景には，社会人になって合唱団に所属して毎回練習に行くことへの[GIS1: モチベーションは高くない]という気持ちと[GIS2: やるとしたら毎回練習に出席したい]という学習に対する真摯さゆえの葛藤があった。それでも[DIS28 : 合唱と出会えてよかった]や [DIS29: 当時合唱を選んでなかったら全然違った人生になっただろう]という，合唱に対するポジティブな気持ちは 20 年程度経過した現在ももっており，[DIS30: 合唱を再開したい気持ちもある]。歌っていない時期が長いので，続けておけばよかったという [DIS31: 淡い後悔]ももっている。近年音楽以外では，[GIS3: マラソンへの興味・挑戦]の意欲が芽生え，県内のマラソン大会へ応募したり，県外の遠方にも走りに行く機会があったりする。

【EFP: 合唱活動を継続しない】という選択をしたからといって全く合唱と関わる機会がなくなってしまったわけではなく，数年に 1 回の大学合唱団の OB 演奏会に参加しており， [SD26: OB 合唱をすると合唱への熱が再燃する]ことも，[SD27: 機会があったら歌いたい]という気持ちになることもある。また，SNS や年賀状等のやり取りを通して[SD28: 現在も同級生とは交流がある]ことからも，合唱活動に対する思いは残っている。A さんと奥さまは大学合唱団の同級生で，合唱が奥さまとの出会いの場であった。奥さまは現在も合唱を含めたさまざまな音楽活動をおこなっており，A さんはそんな奥さまを羨ましいとも思っている。

４．考察

４．１　自己実現に向かう音楽学習への取り組み

A さんは高校時代に《IP1: 先生の混声へのこだわり》や《IP2: コンクールが好きではない先生の下での活動》という外的要因によって，自分の満足いく活動ができなかったことを心残りとしていた。進路選択の際にはその心残りも動機づけのひとつとなり【BFP2: 大学で合唱ができる場所を選択する】ことにした。必ずしも過去の経験に対してポジティブな感情のみが音楽学習の継続を動機づけるわけではなく，A さんのように全国高校総合文化祭での衝撃的な体験をとおして，自分の活動を見つめ直し，新たな理想の姿や自己実現のための目標が掲げられたことで，学習に対する新たなモチベーションが生まれている。また，高校時代に経験できなかったコンクールという舞台への憧れは，他の高校生の姿を見たり，自分の経験していない未知なる世界へ期待を寄せたりすることによって高められている。このように，音楽学習の深化には，他の学習者の姿が影響することがある。

大学合唱団では 1 年目からコンクールで全国大会を経験することになる。全国大会経験後も，よりよい音楽づくりにこだわるだけではなく，団員が気持ちよく活動できるように合唱団の運営の改革をしたり，練習をよりよいものにするために試行錯誤したりすることによって，より深い音楽学習への取り組みがなされている。大学合唱団でのこのような学習の姿は，高校時代に未消化であった合唱への憧れや期待が叶い，A さんのなかでは活動に満足した状態であると言ってよい。

社会人になり，団体に所属して活動することはしていないが，数年に 1 回の大学合唱団の OB 合唱に参加して合唱とのつながりをもっていることは，医師という多忙な仕事や家庭生活のなかで，実現可能な範囲での活動によって自己実現に向かっていると解釈できる。

４．２　生涯音楽学習の継続の困難さに存在する問題

生涯音楽学習継続の困難さに存在する問題について，本研究では「学習継続への葛藤」と「合唱活動の特殊性」の 2 点から指摘したい。

４．２．１　学習継続への葛藤

A さんの TEM 図の矢印は，高校時代に音楽部に入部してから大学合唱団の卒業までの間，合唱活動を継続する方向へと向かっている。しかし，大学を卒業して就職するというライフイベントの際に，外的要因と内的要因の拮抗が生じている。これまでおこなってきた，学習を継続してきた人へのインタビューにおいても，学習の継続の有無についての葛藤の時期は存在していた（小坂 2020）。その際に葛藤を乗り越えることで継続に向かうケースは，学習の強度が強い人や，葛藤の経験が何度もある人が多い。A さんも，学習継続に対して，葛藤を乗り越えた経験があれば，学習を継続した可能性もあったであろう。

４．２．２　合唱活動の特殊性

A さんは社会人になってからも何度か合唱団で活動したいと希望する時期があった。しかし夜勤や休日出勤などもある勤務形態から，合唱団での活動の再開には至っていない。その理由の 1 つに，きちんと毎回練習に参加したいという謹厳な性格と学習への意欲が足かせになっていることも考えられる。ピアノや声楽などのように一人で演奏するのではなく，多数の人が集まって一緒に歌うという活動形態が障壁となり，学習の継続が困難となっている。小坂（2020b）で示唆するように，合唱は，練習をとおして「同じ生命的時間を生きること」によって学習者同士の関係が構築され，他者とグルーヴする感覚やフロー体験によって継続意志が高められる。また，練習のプロセスで学習者同士の志向がうまれ，努力する姿勢によって，「所属する集団において，自立した学習者に向かうためのメンタリティ」が獲得される。このことから，練習に参加することによってさらなる学習欲求を生み出したり，他者との関係性を構築したりするのにもかかわらず，練習に参加できなければそれらができずに合唱の本質的な学習の意味が失われてしまう，と A さんは感じているのではないだろうか。そうであれば，A さんは大学時代にはすでに合唱の本質的な学習の意味をとらえ，実践していた優秀な学習者であるともとらえられる。

学生時代の部活やサークルではじめた合唱活動を，自立した学習者として，さらに深化させたり，継続的におこなったりするためには，それぞれの活動のなかに何が必要なのだろうか。A さんのように「人と時間を合わせて集まる」ことがハードルとなるのであれば，同じ「歌う」という活動では「独唱」の形態を選ぶこともできる。しかし A さんがそれをしないのは，やはり人と集まって歌う合唱という活動であることに価値を感じているからであろう。合唱は他の人と一緒に歌うため，一人の責任が少なく，活動の裾野が広い，と一般には思われがちであるが，演奏者の立場からすればアンサンブルのほうが大きな責任が伴う。合唱活動の価値とは「練習に参加することで得られるその時々の関係性やメンタリティ」までを含む包括的なものと言えよう。

４．３　過去の学習経験が現在に与える影響

A さんは，現在も合唱関係の同級生とつながりがあり，今回のインタビューにも快諾していただけるなど，過去の学習経験をポジティブにとらえ，誇りに思っているととらえられる。また，合唱団の活動で奥さまとも出会い，幸せな生活が送れていることからも，合唱との出会いは A さんの人生が豊かになるために大きな影響を与えたと考えられる。

また，現在でも数年に 1 回の大学合唱団の OB 合唱には参加するなど，定期的な合唱活動を中断したとはいえ，活動が完全に途切れているわけではない。このことから，高校・大学時代に熱心に取り組んだ合唱活動は，社会人になって音楽と関わるための基盤づくりであったともとらえることができる。A さんがインタビューのなかで「エレクトーンを習っていたから，高校時代，音楽部に勧誘されても歌うことに抵抗がなかった」と話したように，過去の音楽経験は，学習者のハードルを下げることに役立つものとなる。

これらのことから，音楽学習に熱心に取り組んだ経験をもっていると，定期的な活動に熱心に取り組む強い強度の学習者ではなくても，置かれた状況において自分のペースで活動に取り組める，自己調整学習者となりうる可能性が示唆できる。

５．まとめと今後の課題

本研究で対象としたAさんは，自分が納得できる頻度や強度での学習との付き合い方をしたり，他者との関わりを深く考えたり，自己実現に向けてさまざまな方略を使うことができる学習者だとみとることができた。Aさんの本当の理想は，仕事や子育てをしながら，合唱団の決められた毎回の練習に欠かさず参加しながら合唱活動に取り組むことだろう。しかし現在のAさんはそれを実行することが難しい状況にある。そのため，数年に1回開催される大学合唱団のOB合唱に参加することで，自己実現を果たそうとしているとも解釈できる。

本研究では対象者1名の語りを丁寧に検討し，その人の学習経験を深く解釈しようとしたため，活動を中断した人の傾向をみとることはできない。また，対象者について高校と大学時代に活動をした後の社会人になって以降の音楽経験がそもそも限定的であったため，社会人になってから学習を中断した学習者とは学習の中断の意味や性質が異なると考えられる。さらに，大学合唱団は団体によって指導や運営のあり方などが全く異なるため，団特有の性質が本人の継続性に影響を与えている可能性もある。これらは本研究の課題である。

引用・参考文献

川村有美（2005）「関係論的な学びとしての成人音楽学習」『音楽文化の創造』第36巻，pp.62-65

クラントン，P. A.（著）入江直子・豊田千代子・三輪健二（訳）（2005）『おとなの学びを拓く―自己決定と意識変容をめざして―』鳳書房

小坂光（2019）「合唱活動参加者の音楽学習に対する認識の変容―生涯発達を視点に―」『音楽学習研究』第15巻，pp.21-30

小坂光（2020）「合唱活動参加者における指導者や共同学習者に対する認識の変容―音楽学習の認識の変容とともに―」『音楽文化教育学研究紀要』No.32，pp.23-32

小坂光（2021a）「合唱活動の場における相互行為」中国四国教育学会編『教育学研究紀要（CD-ROM版）』第66巻，pp.168-173

小坂光（2021b）「合唱活動参加者の意識変容―共同学習者間の相互行為・実践コミュニティ参加の視点から―」『音楽文化教育学研究紀要』No.33，pp.31-37

大野内愛・伊藤真・枝川一也・樋口史都（2021）「学習者の語りからみるオペラ制作の試行錯誤―COVID-19パンデミック下での活動に着目して―」『音楽学習研究』第17巻，pp.1-12

安田裕子・サトウタツヤ（2012）『TEMでわかる人生の経路』誠信書房